

## 肥前の初期横穴式石室とその拡散

重藤輝行

## はじめに

横穴式石室の出現は古墳時代を前半と後半に二分する葬制上の大きな画期となったとされる。古墳時代の朝鮮半島や中国大陸との対外交渉のルートや時期、性格も関連し、重要な研究対象となっている。

日本での横穴式石室の出現と各地への拡散は、大きくは九州型と畿内型に分かれる。九州型は筑前・筑後・肥前を中心とした北部九州型と、熊本県を中心とした肥後型に細分される。肥前の初期横穴式石室については、後述するように、初期横穴式石室の展開の中で大きな鍵となるとされてきた。唐津市谷口古墳は日本最古の横穴式石室であり、肥前には北部九州型と肥後型の双方の要素をもつ筑肥型初期横穴式石室が成立した。

ここでは古墳時代中期の肥前の横穴式石室を中心に検討を行う。この地域の初期横穴式石室について筆者が独自の調査により新資料を発見したり、新たな方法論で分析したわけではないが、近年、九州北部の内外での初期横穴式石室の拡散について検討する機会があり、それを通じてこの地域の果たした役割も大きいと理解できるようになった。そこで、今回は、そのような問題意識のもと、古墳時代中期の肥前の初期横穴式石室を概観し、その各地への拡散の意義を論ずることにしたい。

## 一 研究の展開

**初期の調査と研究** 佐賀県における初期の横穴式石室の調査例としては、大正一三年に発見された唐津市横田下古墳に関するものがある（佐賀県一九三〇、松尾一九五一）。第二次世界大戦後、古墳発掘調査事例の蓄積が進む以前の段階では、横田下古墳は九州の初期横穴式石室の典型例として取り上げられ（小林一九六二）、肥前さらには九州北部が横穴式石室出現、普及の鍵となる地域として注目される現在の研究へとつながっている。また、戦時中の目達原古墳群の発掘調査（松尾一九五〇）では古墳時代中期から後期の連続的な首長墓群が調査され、目達原大塚古墳などの初期横穴式石室を含め、横穴式石室の変遷を説明する糸口となった。

一九五〇年代前半には初期横穴式石室の佐賀市関行丸古墳が発掘調査され、詳細な実測図が記録されるなど、現在でも貴重な資料となっている（渡辺一九五三）。これらの肥前の横穴式石室の調査結果を重要な基礎資料の一部として、森貞次郎氏（森一九四九）、樋口隆康氏（樋口一九五五）、小林行雄氏（小林編一九六四）らによって、九州の横穴式石室の変遷、畿内に先行して出現する九州の横穴式石室の意義が論じられた。

**九州の初期横穴式石室に対する注目** 小林行雄氏、樋口隆康氏、白石太一

郎氏（白石一九六五）は、畿内の初期横穴式石室と九州の初期横穴式石室が系統を異にすることを解明した。また、一九六五年に始まる福岡市老司古墳の発掘調査や、一九八一年の福岡市鋤崎古墳の発掘調査により最古級の横穴式石室が明らかになり、九州の初期横穴式石室の研究が活性化することになった。

柳沢一男氏、蒲原宏行氏は北部九州の初期横穴式石室の変遷を検討し、大型の初期横穴式石室と、玄室幅の幅の狭い小型の「竪穴系横口式石室」の間が時間差ではなく、階層差によることを明らかにした（柳沢一九八二、蒲原一九八三）。山崎信二氏は九州の横穴式石室の展開を整理し、初期の一群を含む九州系の横穴式石室の拡散を検討した（山崎一九八五）。また、柳沢氏や小田富士雄氏（小田一九八〇）、森下浩行氏（森下一九八六・一九八七）は九州の初期横穴式石室と朝鮮半島の祖型との関係を論じている。これらの検討の中で、横田下古墳石室が老司古墳、鋤崎古墳より新しい段階に朝鮮半島から伝わった石室のタイプであること、初期横穴式石室の定型化したタイプとして関行丸古墳のような石室形態が中期後半に出現することなど、肥前の初期横穴式石室に対する理解も深められることとなった。一方、唐津市谷口古墳の東西石室は以前は、長持形石棺を設置した合掌型の側壁をもつ竪穴式石室と認識されていたのに対して、土生田純之氏は横口部を持つ可能性を指摘し、後に発掘調査で実証されることとなった（土生田一九八三）。

また、柳沢一男氏は北部九州型と肥後型の双方の特徴をあわせ持つタイプとして筑肥型初期横穴式石室を設定し、肥前、筑後に多いとした（柳沢一九九三）。このような先行研究を考慮し、本稿では筑肥型初期横穴式石室の展開をそれ以外の初期の横穴式石室の展開と区別して検討する。

**近年の研究** 一九九九年、九州前方後円墳研究会では、九州各地の横穴式

石室を集成した資料集を刊行した。集成により記録保存のための発掘調査を経て失われた古墳や、現存するものの見学困難な横穴式石室についての情報が網羅され、肥前を始めとする九州各地の横穴式石室の展開を概観し、比較できるようになった。また、初期横穴式石室に限らない中期から後期を通じた研究の大きな画期となった。同資料集に掲載された小松讓氏の論考では後期において片袖の石室の多い佐賀平野西部牛津川流域や独立立柱の玄門を形成する佐賀平野西部杵島山麓の地域的な類型の存在が解明された。これは肥前の横穴式石室の研究を前進させるとともに、九州の横穴式石室の地域型の設定に大きな影響を与えた（小松一九九九）。

近年では、初期横穴式石室に限らず、古墳時代を通じた横穴式石室の技術的な特性を考慮した地域型の設定が進んでいる。九州北部では地域性に基づいて、糸島型、宗像型、筑前型などが設定されている（藏富士二〇〇九、小嶋二〇一二他）。肥前をタイプとするものはないが、後期の横穴式石室では西北九州型が設定されている。本稿では肥前の初期横穴式石室について新たにタイプを設定するものではないが、地域型の背景にある技術的な特徴の形成過程、地域間関係にも注目したい。また、宇野慎敏氏は黄金山古墳など長崎県内の横穴式石室を検討しており、肥前西部の初期横穴式石室に対する重要な視点を提示している（宇野二〇一三）。

一方、韓国ではソウル市、京畿道・忠清道で百済漢城期の横穴式石室の調査が進んでいる（金武重二〇二三、金奎運二〇一八他）。谷口古墳や北部九州型、肥後型の直接の祖形となるような横穴式石室はまだ発見されていないが、今後の研究の進展が予測される。また、五世紀後半～六世紀前半の朝鮮半島南海岸地域、全羅南道崇山江流域では、前方後円墳など倭系古

年代	古墳時代編年 1～10期は『前方 後円墳集成』編年	近畿・中四国	九州	朝鮮半島	
300 350	前期	1期	西新町	(313 高句麗・楽浪郡を滅ぼす)	
		2期			
		3期	福岡・一貴山銚子塚	353 平壤駅前佟利墓 南井里 119 号 (369 百濟・七支刀)	
400 450 500	中期	4期	大阪・津堂城山	可楽洞 5 号 (371 百濟・近肖古王平壤攻撃) (391 高句麗・広開土王即位)	
		5期 須恵器 編年 TG232	佐賀・横田下	409 徳興里	
		6期 TK73	岡山・千足 京都・雲部車塚	熊本・大鼠蔵尾張宮 熊本・小坂大塚	(427 高句麗・平壤遷都)
		7期 TK216 (ON46) TK208	大阪・大仙陵 福井・向山 1 号 三重・おじよか	佐賀・小城円山	福岡・勝浦峯ノ畑 皇南大塚 (458 新羅・訥祇麻立干没)
		8期 TK23 TK47	大阪・高井田山	佐賀・関行丸	福岡・勝浦井ノ浦前方部 福岡・セストノ 福岡・番塚 馬山里 1 号 (475 百濟・熊津遷都)
		9期 MT15 TK10			(528 磐井の乱) (523 百濟・武寧王陵)
550 600	後期	10期 MT85 TK43 TK209			

第 1 図 本稿で用いる土師による時期区分と前方後円墳集成編年・絶対年代

墳で九州系の横穴式石室がかなり普遍的に採用されていること、朝鮮半島での変容も見せることが明らかになっている（金洛中二〇〇八、洪濬植二〇〇九他）。朝鮮半島の事例は、三国時代の考古学、歴史学の脈絡の中に位置づけて評価する必要がある、ここで本格的に検討することは難しいが、肥前の横穴式石室の検討から提起できる若干の展望について、本稿では言及することにした。

**本稿での問題設定** 以上のような研究の展開を受けて、本稿では、佐賀県を中心とする肥前の初期横穴式石室を取り上げる。地域性の形成を見るために、各種の初期横穴式石室の展開を整理し、階層的な差にも注意する。さらに、肥前の横穴式石室は九州外に拡散することが指摘されており、その検討を行う。また、九州北部での横穴式石室の普及にも肥前の横穴式石室が鍵になると指摘されているので、その様相を検討し、古墳時代の地域社会や古墳建造の社会関係を考慮してその背景を考察する。

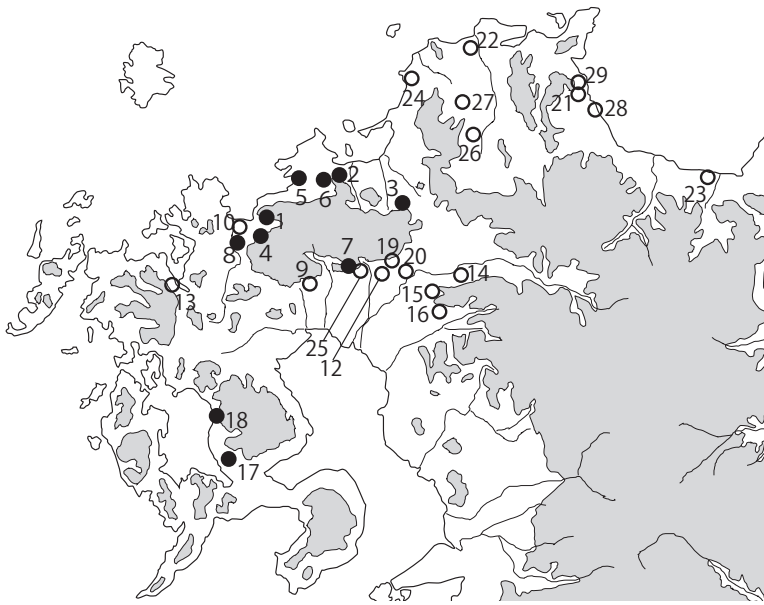
なお、本稿では古墳時代中期の事例を初期横穴式石室と捉え、検討の対象とする。時期を細かく表示する場合は『前方後円墳集成』の編年（近藤編一九九二、以下「前方後円墳集成編年」とする）を基準に表現する。前方後円墳集成編年四～八期を中期とし、大阪府陶邑窯跡の須恵器編年と対応させればTK七三型式を六期、TK二一六～TK二〇八型式を七期、TK二三～TK四七型式を八期と考える（第一図）。

なお、筆者は九州北部の古墳時代の諸問題を論じる際に、肥前の横穴式石室の様相と他地域との関係について断片的に言及したことがあった（重藤二〇一一a・二〇一一b・二〇一五・二〇一八a・二〇一八b他）。本稿はこれらの筆者の先行する文章中での肥前の横穴式石室に関する記述を基礎に作成した部分もある<sup>①</sup>。

## 二 肥前における初期横穴式石室の展開

### (一) 横穴式石室の出現

**九州北部最古級の横穴式石室** 北部九州では古墳時代中期初頭、前方後円墳集成編年四期には佐賀県唐津市谷口古墳(家田他編一九九一)、福岡市西区鋤崎古墳(杉山二〇〇二)、福岡市南区老司古墳(山口他編一九八九)で最古級の横穴式石室が出現する(古墳の分布は第二図参照)。これらの石室の前後関係に関しては、谷口古墳、老司古墳三号石室は石室短壁上部を



1. 谷口 2. 鋤崎 3. 老司 4. 横田下 5. 釜塚 6. 丸隈山  
7. 五本黒木丸山・金立開拓・久保泉丸山・鈴熊 8. 双水柴山1号 9. 小城円山  
10. 樋ノ口 11. 西隈 12. 目達原 13. 夏崎 14. 木塚 15. 藤山甲塚・浦山  
16. 石人山 17. 黄金山 18. ひさご塚 19. 船石2号 20. 東尾大塚 21. 御所山  
22. 大城大塚 23. 葛原 24. 津屋崎 25. 関行丸 26. 小正西・山の神 27. 小倉  
28. 稲童 29. 番塚  
●は前方後円墳集成編年4～5期、○は前方後円墳集成編年6期以降

第2図 関連古墳分布図

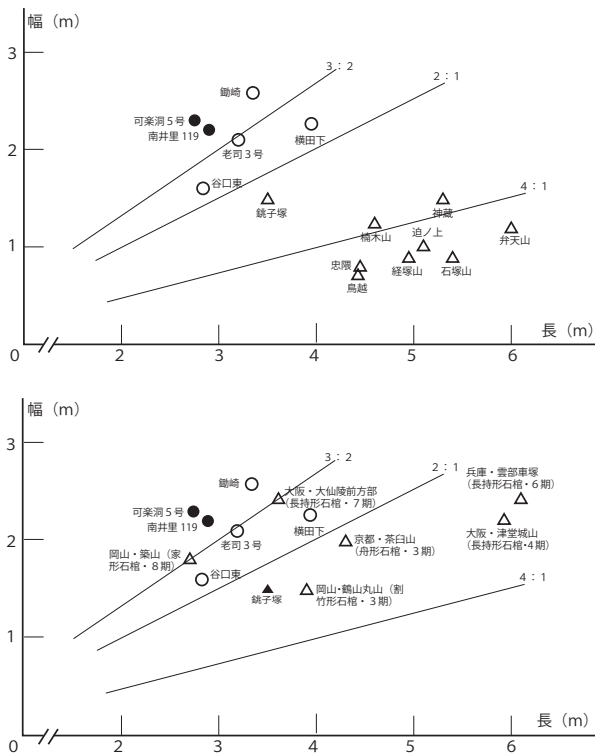
開口部とするのに対し、鋤崎古墳は明確な両袖、玄門部を持つかなり完成された形態をとることが注目される。副葬品の様相も考慮し、現状では谷口古墳が最も先行すると推測する研究者が多い。

谷口古墳は全長七七mの前方後円墳で、後円部に二基の石室を設け、前期後半～末の指標的な副葬品である仿製三角縁神獸鏡、石製腕飾類のひとつの車輪石を副葬するとともに、横穴式石室内に中期の畿内の大王墓の埋葬を特徴づける長持形石棺を納めている。副葬品と長持形石棺の年代を考慮すると四期に位置づけるのが妥当と思われる。

なお、近年では、中期を須恵器出現以降と考え、さらに須恵器出現を四世紀末に遡らせる説も強くなっている。その場合、これら三古墳は四世紀中頃近くになり、古墳時代前期後半となる。ただ、筆者は須恵器の出現は四〇〇年代に下ると考えているので、九州の横穴式石室の出現期である四期を四世紀後半でも末に近い頃、中期初頭と考えている(第一図)。

**谷口・老司・鋤崎の石室構造とその系譜** 谷口古墳の東西両石室は玄室短壁の上半部を開口部とし、側壁を傾斜させて合掌状にするなど、横穴式石室の構造から大きく外れる特徴をもつ。ただ、玄室平面形は先行する九州の横穴式石室より幅広で、鋤崎古墳やソウル市可楽洞五号墳に近い(第三図上)<sup>2)</sup>。谷口古墳では長持形石棺を床に設置するので、横穴式石室とは別に、畿内の埋葬方法を受容し、石棺設置のために幅広の石室形態になったとする仮説も考えられる。しかし、長持形石棺を納めた各地の石室のうち、前方後円墳集成編年七期の大仙陵古墳前方部の石室は幅広であるが、四期の津堂城山古墳、六期の雲部車塚古墳は長大で、谷口古墳とは大きく異なる(第三図下)。したがって、谷口古墳の幅広の平面形も横穴式石室としての設計によるものと解釈するほうが良いだろう。





第3図 谷口古墳・老司古墳・鋤崎古墳石室の平面規模と関連資料との比較

老司古墳三号石室は玄室短壁の上部に横口部を設け、大型の板石で閉塞する特異な構造であり、谷口古墳の開口部と同様の発想と言えらる。一方、奥壁、側壁の持ち送りは竪穴式石室の構築技法からの説明が難しく、鋤崎古墳と同様に横穴式石室の技術を前提にしたと考えられる。また、石室平面形は、谷口古墳より幅広で、横穴式石室の基本設計を導入したものである。なお、老司古墳一・二・四号石室は、玄室幅一・〇m以下の狭長な玄室に、横口を設けた小型の初期横穴式石室である。後述するようにこの種の石室は大型の初期横穴式石室と共存し、八期まで続く。

谷口古墳、老司古墳と比較すると鋤崎古墳は玄門部を備えていて、本格的な横穴式石室に近い。玄室は幅広で、ソウル市可楽洞五号墳や平壤市南井里一一九号墳と長幅比は近似する(第三図)<sup>3)</sup>。この鋤崎古墳を基準とすると、九州北部の横穴式石室の起源は、すでに指摘されるように可楽洞五

号墳や平壤南井里一一九号墳等に求めて良いと思われる(小田一九八〇他)。谷口古墳、老司古墳も横穴式石室の基本的な平面プランは導入を果たしていると言えることができる。朝鮮半島、特に四世紀後半に横穴式石室を導入していた百済と九州北部の首長層の間の対外交渉により、葬送儀礼に関する情報を直接入手するか、石室構築技術者を受け入れることで九州北部に横穴式石室が出現したと推測しておきたい。

## (二) 大型の初期横穴式石室の形成と定型化

**北部九州型初期横穴式石室の成立** 北部九州型初期横穴式石室のうち大型のものは、明確な羨道の無い平面長方形の玄室に、基本的に両袖の玄門部を設置し、水平に近い天井のものである。このような横穴式石室は前方後円墳集成四期の鋤崎古墳に始まると言って良い。

唐津市横田下古墳(唐津湾周辺遺跡調査委員会編一九八二)は鋤崎古墳にやや後出する。横田下古墳では片袖の傾向が見え、明確な両袖をなす鋤崎古墳とは異なるので、森下浩行氏は中期前半に新たに百済から導入された石室形態によるものと考え(森下一九八七)。ところで、横穴式石室では武器、馬具、装身具等に加え、朝鮮半島の葬送儀礼の影響で土器を副葬することが多く、土器副葬が稀な竪穴式石室の葬制との大きな違いを示す。しかし、九州北部の中期の横穴式石室では基本的に土器の副葬が見られない(土生田一九八四他)。このような中で横田下古墳では土師器高杯・小形甕などの土師器が石室内に副葬されていて、百済から新たに導入された石室形態とする指摘と符号する。

これら大型の横穴式石室に対して、小型で狭長なため主軸に直交する埋葬が不可能な「竪穴系横口式石室」とも呼ばれる初期横穴式石室が存在す

ることも九州北部の特徴である。老司古墳においては大型の初期横穴式石室である三号石室と小型の横穴式石室である一・二・四号石室とが共存し、両者の間の階層差と捉えられる(柳沢一九八二、蒲原一九八三他)。ここでは玄室幅一・六m程度を境界とし、大型のものを初期横穴式石室A類、小型のものを初期横穴式石室B類としておきたい(重藤一九九二)。

**北部九州型初期横穴式石室の要素の定型化** 前述した北部九州型初期横穴式石室の特徴の中で、六・八期に定型化し普及する要素としては、板石を立てて突出させる両袖、玄室の基底部に「腰石」と呼ばれる大型の板石を立てる構造、水平に近い天井部がある。これらは他地域において、北部九州系の初期横穴式石室を抽出する際の指標にもなる。

このうち板石による両袖の成立について柳沢一男氏は糸島市釜塚古墳(石山一九八一)あるいは福岡市西区丸隈山古墳(柳沢一九八六)の頃とし(柳沢一九八二他)、横田下古墳の築造から間もない五期と考えられる。肥前の板石を立てて袖部とする初期の事例に、後述する筑肥型の佐賀市五本黒木丸山古墳(第四図二、木下一九六三)、佐賀市久保泉丸山二号墳があり、久保泉丸山二号は土師器から五期でも新しい頃と推測される。

腰石も北部九州型初期横穴式石室の特徴的な構造であるが、肥前の初期横穴式石室の中で腰石の成立をみると、佐賀平野では佐賀市久保泉丸山二号墳が初期の例と考えられる。唐津平野ではB類初期横穴式石室であるが、五期を下らない唐津市双水柴山一号墳(第四図三、中島編一九八七)にも腰石を見ることが出来る。肥前には腰石を設置する初期の例がいくつも見られ、肥前で成立が九州北部の他の地域に先行した可能性がある。

また、北部九州型初期横穴式石室に特徴的な玄室の奥壁側の幅に対して、玄門側の幅の狭いいわゆる「羽子板状」の玄室平面形も、肥前に多い

特徴的な要素と指摘される(甲元二〇一九)。

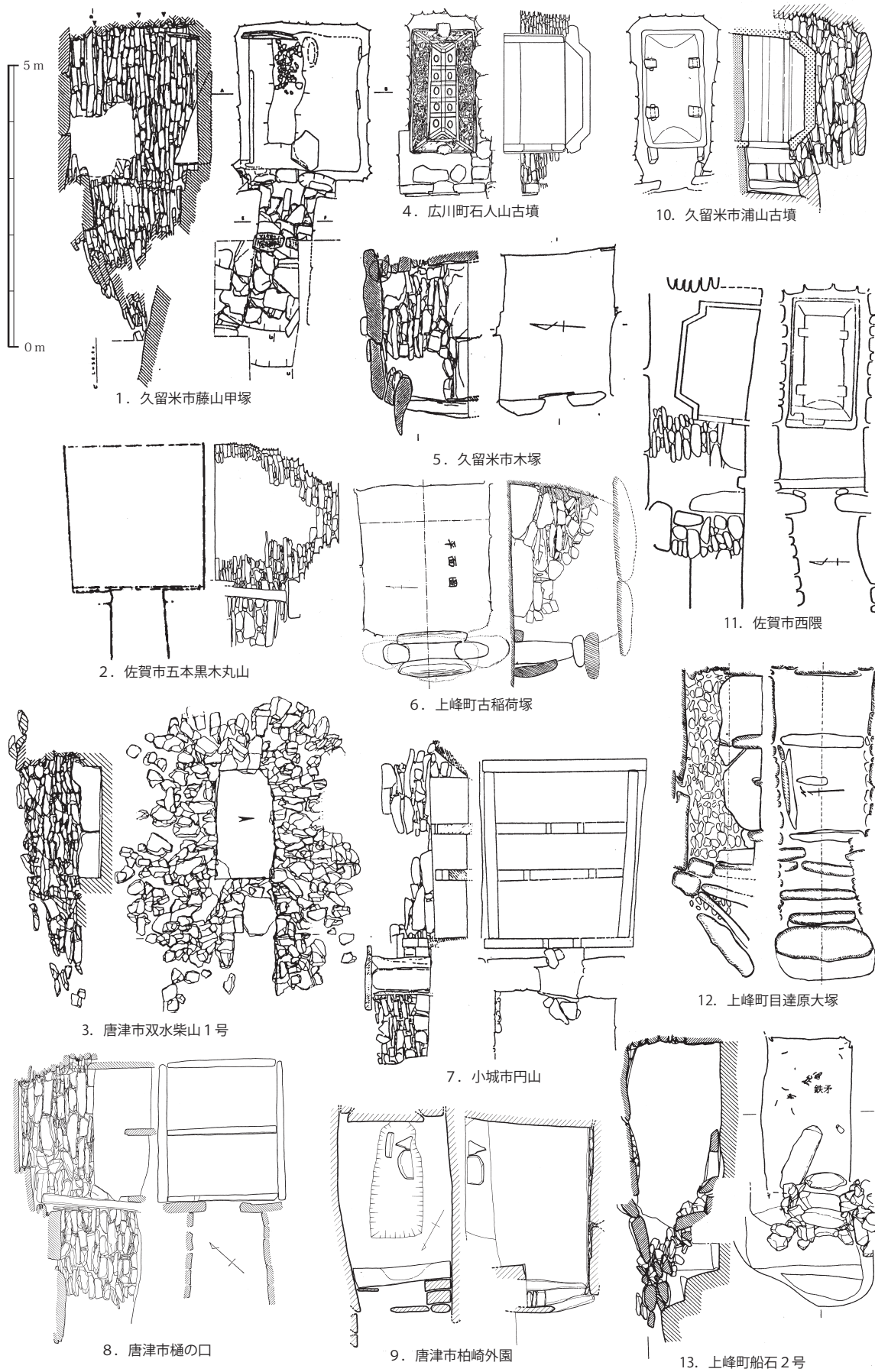
**佐賀平野の初期横穴式石室A類** 首長墓級の古墳を見ると上峰町日達原古墳群中の目達原大塚古墳(第四図一二)や佐賀市関行丸古墳(第七図五)等がある。目達原大塚古墳は玄室天井が水平であるが、関行丸古墳は低い前壁を形成し、天井を奥壁に向かって高くしており、より完成した姿と捉えられる。古墳群中では、佐賀市久保泉丸山古墳群(東中川編一九八六)や同金立開拓古墳群(蒲原他編一九八四)で石室の展開をたどれる。

### (三) 小型の初期横穴式石室の成立と先行する墓制

**北部九州型初期横穴式石室B類の規定** 大型の北部九州型初期横穴式石室A類とともに、奥壁幅が一・六mに満たず、奥壁側に主軸に直交して伸展葬することのできないような小型の横穴式石室が存在する。

北部九州の初期横穴式石室について「竪穴系横口式石室」との名称がある。その名称の範囲に、羨道を持たない横穴式石室全体を含める考えもある。その一方で、柳沢一男氏、蒲原宏行氏は奥壁幅の狭いもの、追葬が困難なものに限定している(柳沢一九八二、蒲原一九八三)。後者の見解が妥当と考えられ、上述した初期横穴式石室A類に対して、竪穴系横口式石室と呼ばれるような小型のものをここではB類としている。B類石室は、一部の地域で六世紀に残存するが、九州北部の多くの地域で前方後円墳集成編年八期には終了し、中期を特徴づける墓制となっている。

**初期横穴式石室B類の成立と展開** 初期の例としては老司古墳一・二・四号石室がある。それがどのように展開したか、という問題は十分に解明されていないが、先行する石棺系竪穴式石室の構築技術・構造を基礎に横口部・玄門部を設置したものと考えられる。



第4図 肥前の初期横穴式石室および関連する事例 (1/100、11は柳沢1975から、他は各報告書から転載)



肥前では土師器編年から前方後円墳集成編年五期以前に遡る可能性の高い事例が存在することが注目される。筆者は前方後円墳集成編年四・五期の九州北部の土師器をⅢA期・ⅢB期に区分するが(重藤二〇一〇)、土師器ⅢB期以前ものとして、唐津市双水柴山一号墳(第四図三)、佐賀市久保泉丸山遺跡ST〇一〇号墳・ST〇〇九号墳(東中川編一九八六)、佐賀市鈴熊遺跡ST〇〇四(家田編一九九三)がある。筑前・筑後・豊前北部をみわたしても、前方後円墳集成編年五期以前に遡る可能性が高い初期横穴式石室B類は、これら以外では福岡市南区老司古墳一・二・四号石室程度であり、極めて限定的である。

唐津市迫頭古墳群(唐津湾周辺遺跡調査委員会編一九八二)の「竪穴系横口式石室」は相伴土器が乏しいが、中には五期以前に遡るものもあろう。初期横穴式石室B類の階層的位相 以上のような展開の中で、前方後円墳集成編年四・五期に遡る例について階層的位相を考えると、首長墓級古墳よりはそれに次ぐ階層、あるいは中小円墳等から構成される古墳群の中の古墳に初期横穴式石室B類が見られる。また、老司古墳一・二・四号石室も中心的埋葬施設の三号石室に比べると周辺の従属的埋葬施設と言える。このような階層的位相は、初期横穴式石室に技術的、構造的に先行する埋葬施設である石棺系竪穴式石室との連続性を示すと考えられる。

#### (四) 肥前の筑肥型初期横穴式石室

**筑肥型の定義と分類** 九州の初期横穴式石室は北部九州型、肥後型に大きく分けられる。肥後型は平面方形の玄室で玄室床面に石障と呼ばれる板石による区画施設を設置し、天井は穹窿状をなす。これに対して北部九州型は前述のように長方形の玄室平面で、石障はなく、天井部は水平に近い。

この北部九州型と筑肥型の折衷型式として、肥前・筑後に多い「筑肥型」の初期横穴式石室があり、各部分の要素の違いでA類・B類の二種に区分される(柳沢一九九三)。

**筑肥型A類** 玄室平面長方形で、天井があまり高くなく持ち送りの平天井を形成し、玄室壁体の下部に石障をめぐらすもの。

**筑肥型B類** 玄室平面が方形基調で側壁上部の持送りは弱く、横断面形が逆台形で一枚の天井石を架構し、石障を採用しないもの。

**肥前の事例** 佐賀平野における事例としては、佐賀市五本黒木丸山古墳、佐賀市久保泉丸山古墳群ST〇〇二号墳、小城市小城円山古墳がある。五本黒木丸山古墳(第四図二)、久保泉丸山ST〇〇二号墳は方形の玄室平面形に穹窿天井であるが、石障を設置せず筑肥型B類に相当する。出土した土師器から考えて久保泉丸山ST〇〇二号墳は五期でもやや新しい頃と考えられる。また、二基の古墳は近接する位置にあるが、腰石の有無、石材の細かさから考えて、五本黒木丸山古墳が先行すると考えられる。小城円山古墳(蒲原一九九八、第四図七)は床面に石障を設置するが、長方形の玄室平面、玄室を直交方向に区画する石障配置が肥後型とは異なり、筑肥型A類に相当する。副葬品の詳細が不明であるため時期の決定は難しいが、前方後円墳集成編年六・七期の佐賀市船塚古墳に後続する首長墓と考えられる。

上峰町目達原古墳群中の目達原大塚古墳は奥壁や側壁奥部は腰石を設置し、北部九州型初期横穴式石室A類に含めて良いが、側壁の前方側には壁体より内側に大型の板石を設置し、筑肥型の石障を簡略化したものと推測される。玄室中央部の板石による区画も小城円山古墳や唐津市樋ノ口古墳(唐津湾周辺遺跡調査委員会編一九八二、第四図八)との関連が想定でき



る。目達原大塚古墳中の古稲荷塚古墳(第四図六)は方形に近い玄室平面であるが、石障がなく、天井も水平に二枚の板石が架構され、TK二一六型式頃の久留米市木塚古墳(横尾編一九七七、第四図五)に近い。唐津平野の唐津市樋ノ口古墳は長方形の玄室に石障を設置し、小城円山古墳との関係が想定される。伊万里湾に面した伊万里市夏崎古墳(柴元一九七一、第六図三)の石室は石障の構築は粗いが、筑肥型と考えられよう。

また、装飾古墳としても著名な佐賀市西隈古墳(木下一九七五、第四図一一)は、玄室内に横口式家形石棺を納める。同様の事例としては福岡県広川町石人山古墳(武藤他一九三七、第四図四)、久留米市浦山古墳(島田一九二五、第四図一〇)があり、筑肥型と同様の展開が考えられる。

**筑肥型の成立の背景** 上述のように、筑肥型は有明海沿岸の肥前、筑後で、肥後型と北部九州型の影響を受けて成立した石室と言える。初期の例として五本黒木丸山古墳、久留米市藤山甲塚古墳(久留米市史編さん委員会編一九九四、第四図一)などが抽出でき、前方後円墳集成編年五期に遡る。また、この頃、有明海沿岸では在来の石棺に横穴式石室の埋葬方法を組合せた横口式家形石棺、埴輪と同様の墳丘への樹物とした石製表飾が成立する。その頂点となり、典型的な事例を石人山古墳に見ることができ、石人山古墳の数代後の八女地域の大型古墳として八女市岩戸山古墳があり、有明海沿岸の首長連合の頂点として位置づけられる。横口式家形石棺、石製表飾と並んで、筑肥型石室も有明海沿岸の首長連合との関係で成立したと考えられる(柳沢一九八七他)。

また、肥前の筑肥型横穴式石室では佐賀平野と唐津湾沿岸の間の関連がうかがえ、肥前が横穴式石室、その背景にある首長間関係において有明海沿岸と玄界灘沿岸との結節点としての役割を担ったと推測される。

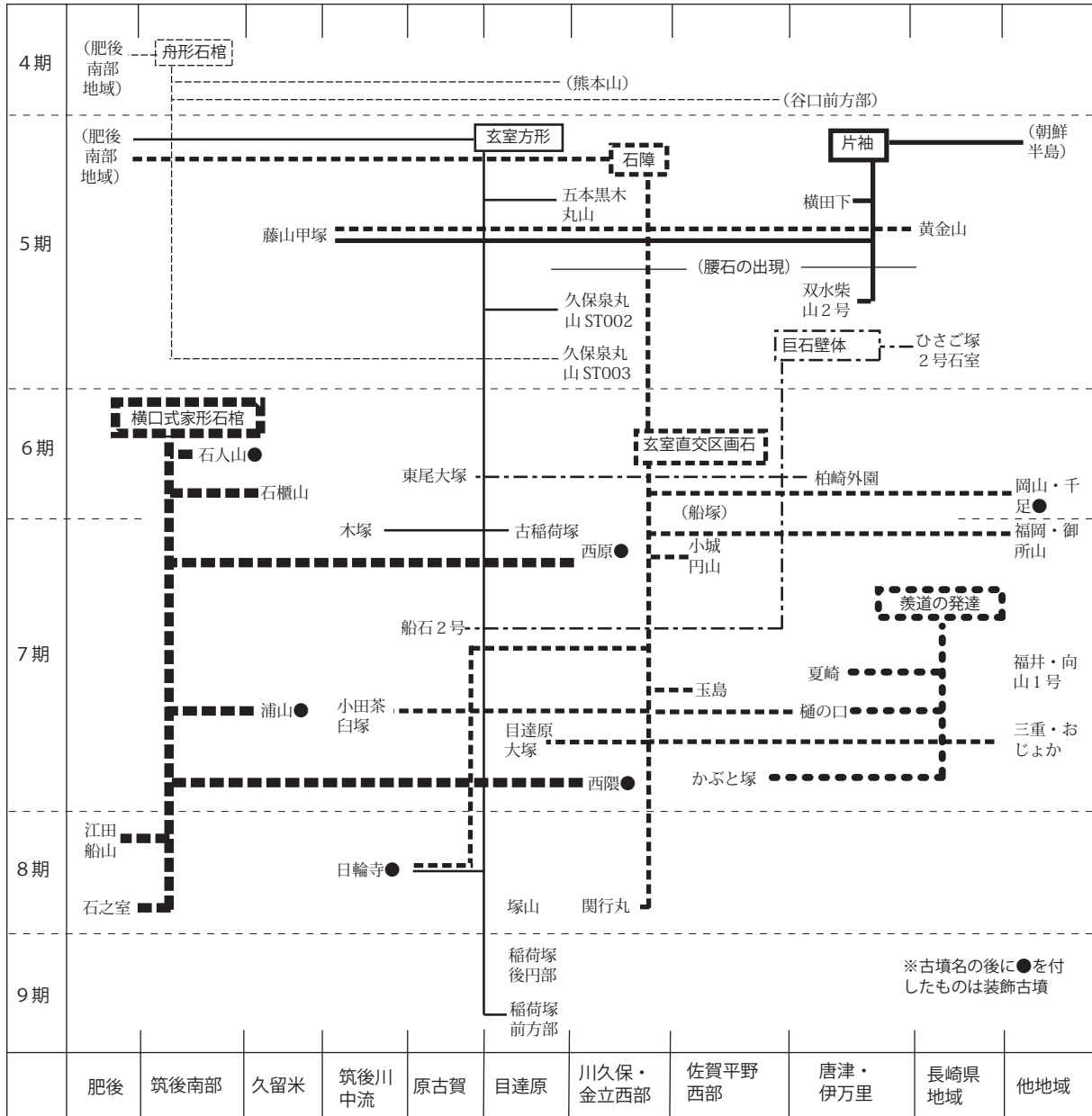
#### (五) 肥前西部の初期横穴式石室の展開

**黄金山古墳の初期横穴式石室** 長崎県側でも数が少ないが、初期の横穴式石室の調査例がある。一九四〇年頃の工事中に発見された大村市黄金山古墳は墳形・規模は不明であるが、小田富士雄氏が出土遺物の少ない中で初期の横穴式石室として紹介し(小田一九七〇)、宇野慎敏氏は老司古墳四号石室、谷口古墳石室、大鼠蔵尾張宮古墳などとの関連性を指摘する(宇野二〇一三)。石室は基部に板石を立て、石障や目達原大塚古墳の石室基部の板石の使用法と類似する。黄金山古墳で注目できるのは横穴式石室とともに、土器の出土が伝えられることである。古門雅高氏(古門一九九九)は完形品であることから石室内に副葬していた可能性を考える。そうであるとすれば、上述した横田下古墳と同様に、新たな埋葬施設として横穴式石室を受容した際に、その儀礼を継承したと言える。

**ひさご塚古墳と肥前東部の石室** 長崎県東彼杵郡東彼杵町に所在する全長五九mの前方後円墳、ひさご塚古墳二号石室も初期の横穴式石室である(下田一九九四)。大型の板石を箱状に立て玄室壁体の主体を構成する特異な構造であるが、佐賀県上峰町船石二号墳(七田一九八三、第四図一三)、みやき町東尾大塚古墳(松尾他一九四九)、唐津市柏崎外園古墳(唐津湾周辺遺跡調査委員会編一九八二、第四図九)と同系統と推測される。

#### (六) 肥前における初期横穴式石室の展開

**展開の過程と意義** 肥前の筑肥型初期横穴式石室、北部九州型初期横穴式石室A類を中心に、筑後まで含んだ横穴式石室の展開をみたものが第五図である。筑肥型の初期横穴式石室を含め、特に前方後円墳集成編年五〜七期に地域間関係が活発である。また、佐賀平野、肥前が横穴式石室の各系



第5図 肥前とその周辺地域の初期横穴式石室の展開

統の形成、展開で基軸となる動きをたどつたと見られる。このような展開が肥前から他地域への横穴式石室の拡散の前提を形成したと言える。

**古墳前期～中期の埋葬施設に占める比率**

古墳前期～中期の埋葬施設に占める比率を調べてみると(重藤二〇一a)、佐賀県内では筑肥型、横口式家形石棺を納めた西隈古墳、初期横穴式石室A類からなる大型横穴式石室は二七二例中三〇例、全体の一・〇%を占める。これに対して筑前西部では八・三%、筑前南部・筑後は三・五%、筑前東部～豊前北部では五・九%にとどまり、佐賀県と比べると少ない。上述のように、肥前は初期横穴式石室の出現が先行するとともに、筑肥型石室の創出もあわせて中期前半～中頃に活発に横穴式石室を受容、築造した地域である。これにより、中期前半段階から初期横穴式石室の普及が進み、そのため数値が大きくなっているのではないかと考えられる。また、このような大型の横穴式石室の普及、その横穴式石室構築技術の蓄積が他地域への拡散の基礎になったと考えられる。

### 三 他地域への拡散

#### (一) 筑肥型の拡散とその背景

**筑肥型初期横穴式石室の事例** 岡山県千足古墳（西田編二〇一五、第六図

一）は全長三五〇mの大型前方後円墳として著名な造山古墳の陪塚で、全長七五mの前方後円墳である。造山古墳陪塚であることから、前方後円墳編年六～七期の築造と考えられる。玄室はやや長方形で天井石は三枚の板石からなる水平天井を形成し、直弧文を浮彫りした石障を設置する。石障自体が熊本県天草地域から輸送された砂岩とされる。

三重県おじよか古墳は一八m弱の円墳と推測される（中村一九九二、第六図二）。宮原佑治氏も指摘するように（宮原二〇一七）、羽子板形の玄室平面形、水平な天井部、玄門及び玄室左側壁下部の石障状の板石の設置と右側壁下部の腰石状の構造は目達原大塚古墳と共通する。また、玄室幅は伊万里市夏崎古墳（第六図三）とほぼ同一である。

福井県向山一号墳は全長四七mの前方後円墳で、TK二〇八型式の須恵器を出した前方後円墳編年七期の横穴式石室である（高橋他二〇一五）。岩盤を方形に掘削して石室底部とする構造は前方後円墳集成編年五期とされる熊本県山鹿市銭亀塚古墳（中村編一九八九）と共通する。

**横穴式石室構築の過程と集団** ここで一般的な横穴式石室の構築の過程を整理すると次のようになる。

- 1…埋葬方法の決定（横穴石室の採用、棺・床面の施設の決定）
- 2 a…棺・床面の施設の基本設計、2 b…石室構造の基本設計
- 3 a…棺・床面の施設の製作、3 b…壁体石材の採取・加工

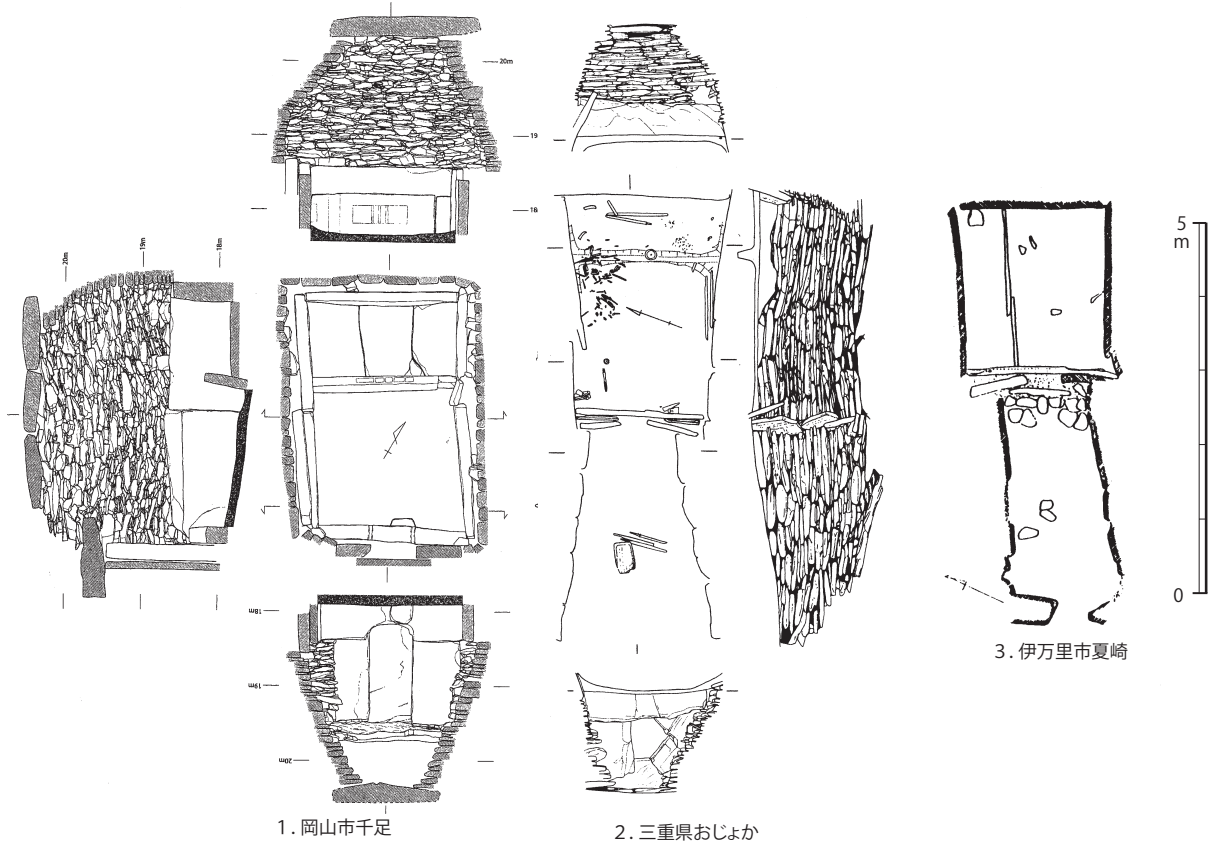
- 4 a…棺・床面の施設の設置、4 b…石室壁体の積み上げ
- 5…埋葬

太田宏明氏は、横穴式石室構築技術の伝播には工人の移動あるいは情報伝達するための個人間あるいは集団間の直接的で密接な接触が不可欠であるが、それとともに特定個人や特定個人を中心とする集団のために築造され、形態の決定に被葬者の意向や社会的立場が反映されやすい、とする（太田二〇一六）。そのような観点から考えれば、1、2 a、2 bは被葬者（ないしはその後継者）の意向や社会的立場が反映されやすい部分と言える。4 a、4 bは工人の移動あるいは情報伝達のための直接的で密接な接触に関わる部分である。3 a、3 bは、古墳所在地近隣の石材を使用する場合は、地元の石材を熟知する集団の関与が必要になる。

**筑肥型石室構築の集団関係** 唐津市樋口古墳の場合は、石障も含め同地域の石材とされ、玄室は穹窿状の天井ではないので筑肥型と言える。2 aの石障の基本設計は有明海沿岸の技術者と在地の石棺等の技術者が関与したと想定される。古墳周辺での谷口古墳、横田下古墳、双水柴山一号墳にまで遡る横穴式石室構築の伝統を考慮すると、2 b・3 a・3 b・4 a・4 bの石室の基本設計・構築、石障の設置は在地の石棺構築・石室構築の技術者が主体と推測される。

岡山市千足古墳の石障は熊本県天草地域から輸送したものであり、壁体の石材は在地のものである。したがって、2 a・3 a・4 aの石障の準備から設置には天草の技術者が深く関与した可能性が高い。3 bの壁体石材の採取・加工は在地の技術者の関与なしには不可能であるが、2 b・4 bの石室の基本設計、壁体の積み上げには天草あるいは玄室構造の類似する筑肥型石室の技術者の関与も想定される。





第6図 各地の筑肥型石室と関連事例 (1/100、西田2015、宮原2017、柴元1971による)

おじよか古墳については、三好元樹氏は見られる目新しさへの指向性が横穴式石室の導入に対しても発揮されたとする。被葬者は在地の人物と考えられ、外交的役割を担い、九州の葬送に関する情報に接して、九州系の横穴式石室を採用したと述べる(三好二〇一七)。

おじよか古墳の石室構築と関係する人々の動きを考えると、1の横穴石室の採用の決定には在地の首長あるいはその後継者の意向が大きく反映したと考えられる一方で、2aの棺・床面の施設の基本設計、2bの石室構築の基本設計や石障状の床面施設、玄室プランの要素から、筑肥型石室の技術者が深く関与したと推測される。3bの壁体石材の採取・加工は在地の技術者が主体と考えられる。3aの棺・床面の施設の製作、4aの棺・床面の施設の設置、4bの石室壁体の積み上げには在地の技術者も関与したが、筑肥型石室の技術者が指導的役割を果たしたと推測される。5の埋葬は、在地首長の後継者とその周辺の人々を主体としつつ、広域に活躍した首長の死にふさわしく、畿内や九州北部など他地域の人々も関与した葬送儀礼であったと想像される。なお、上記の筑肥型石室の技術者の中に朝鮮半島出身者が含まれた可能性、肥前に一時、滞在し、筑肥型石室構築を習得した技術者が含まれた可能性も考えられる。

**九州北部での拡散** 筑肥型初期横穴式石室は九州北部にも拡散する様相がうかがえる。成立地を離れて、広がった例としては福岡県荏田町御所山古墳(石山他一九七六)、福岡県芦屋町大城大塚古墳がある。また、大分県宇佐市葛原古墳(小倉他一九八九)の石室も石障状の構造をもつ。これらの古墳も当該地域における首長墓と考えられる。

ここでは詳細に検討しないが、北部九州の各地の筑肥型では、御所山古墳の石障の設置方法、葛原古墳の石障配置及び壁体の構築方法等におい

て、造山古墳などの遠隔地の事例より変形が進んでいる部分もある。肥前の集団の関与が小さい、横穴式石室構築に関する技術の一部が別系統から取り入れられたなどの理由が考えられる。

## (二) 定型化した北部九州型初期横穴式石室A類の拡散

**津屋崎古墳群中の初期横穴式石室** 宗像～福津の北部九州型初期横穴式石室A類の中で、首長墓級古墳での出現当初の例に福津市津屋崎古墳群中の勝浦峯ノ畑古墳（池ノ上他編二〇一一、第七図一）、同新原奴山一号墳（橋口編一九八九、第七図二）がある。勝浦峯ノ畑古墳は玄室中央部に二基の玄武岩石柱を立てる点で特異である。奥壁と側壁後方に玄室高の三分の二を超える大型の石材を立てて腰石とし、側壁前方にも低い腰石を立てる。玄門部は玄武岩石柱を立て両袖とし、片袖風の平面プランになる。袖石上に楣石を設置し、その上に天井石が載る。奥側の立柱から主軸に直交するように屍床状の区画石が設置される。出土した鉄鏃、短甲、馬具等から考えて前方後円墳集成編年の七期の新しい段階と推測され、壁体の構築技法、玄室形態は上峰町目達原大塚古墳からの影響が指摘されている（柳沢一九八二）。また、片袖状の平面形は朝鮮半島から新たに伝わった要素である可能性も指摘されている（森下一九八六）。

新原奴山一号墳（橋口編一九八九）は勝浦峯ノ畑古墳とは比べると奥壁、側壁の腰石は低いが、片袖風の平面形、立柱を立てた袖部や屍床状の区画石は共通する。玄門部の天井は失われているが、勝浦峯ノ畑古墳と同様に楣石を設置し、その上に天井石を架けていた可能性が高いと思われる。勝浦峯ノ畑古墳と構造的に類似しており、近い時期に位置づけられよう。

**遠賀川流域への拡散** 遠賀川流域の最古期の北部九州型A類として飯塚市

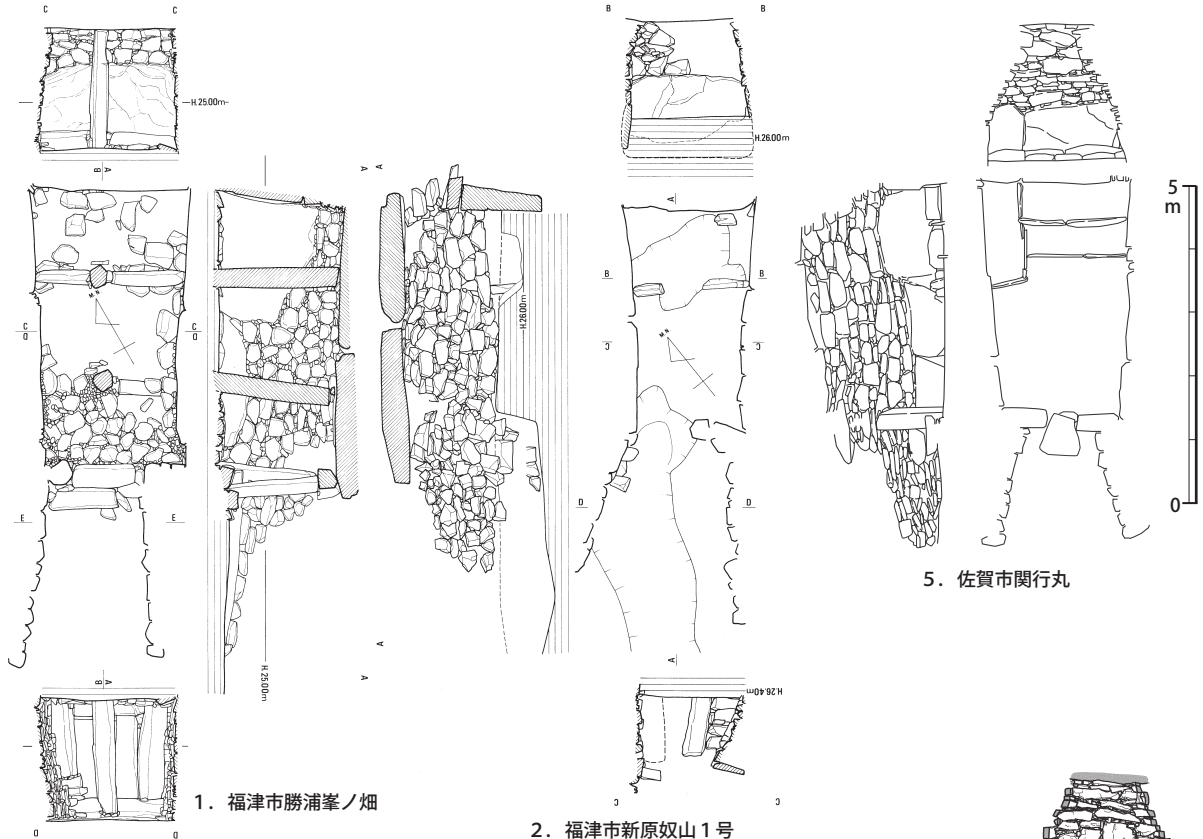
小正西古墳（毛利編二〇〇〇、第七図三）がある。小正西古墳の一号石室は玄室下部に腰石を立て、奥壁を強く持送り、側壁を内傾させて、天井の高い玄室を形成する。玄門部には板状の石を立て両袖とし、その上に楣石を設置する。楣石の上に三段程小振りの石を積み前壁を形成し、その上に天井石を載せたと考えられる。副葬の馬具、鉄鏃からTK二三型式頃の築造が推測され、石室形態は佐賀市関行丸古墳（第七図五）と類似する。

宮若市小倉古墳（小方他編一九八九、第七図四）は須恵器編年との関係をよく示す事例である。石室は玄門袖石と残存する側壁の高さから、袖石の上に楣石を架構し、その上に石を積んで前壁を形成した可能性が高い。出土した須恵器はTK二三型式頃と考えてほぼ間違いなからう。

飯塚市山の神古墳の横穴式石室については略測図しかないが、前壁を形成しており、構造から須恵器編年のTK二三～TK四七型式、前方後円墳集成編年八期に位置づけることが妥当と考えられる（辻田編二〇一五）。

**豊前における横穴式石室の出現・拡散** 拡散の初期は筑肥型初期横穴式石室である荇田町御所山古墳や、行橋市稲童古墳群八号墳・二一号墳（山中編二〇〇五）などの北部九州型B類が見られる。定型化した北部九州型A類が本格化するのには、御所山古墳に後続する首長墓である荇田町番塚古墳（岡村他編一九九三）以降であろう。

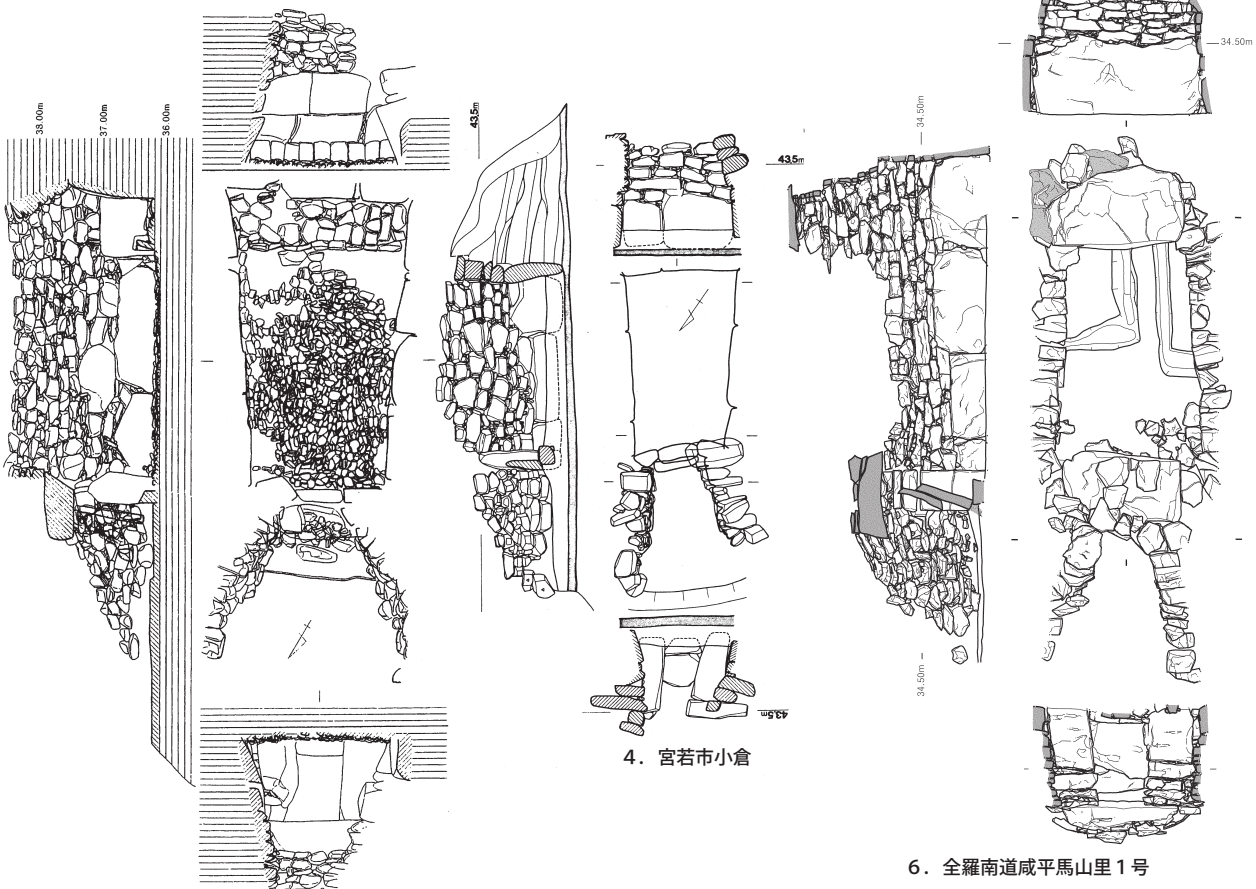
板状の袖石の上に直接、楣石を設置している山の神古墳に対して、番塚古墳では柱状の石の上に二段程石を積んで袖を形成するというやや新しい様相が見える。番塚古墳の横穴式石室築造には遠賀川流域あるいは肥前の構築集団が関与した可能性が想定できるが、石室内には百済から舶載された木棺が埋葬されていた。九州北部と朝鮮半島の間の古墳をめぐる地域間関係は双方向的なものであったと捉える必要がある。



1. 福津市勝浦峯ノ畑

2. 福津市新原奴山1号

5. 佐賀市関行丸



3. 飯塚市小正西1号石室

4. 宮若市小倉

6. 全羅南道咸平馬山里1号

第7図 九州東部の北部九州型初期横穴式石室A類と関連事例 (1/120、各報告書による、5は再トレース)



## (三) 朝鮮半島南海岸部の横穴式石室との関係

九州系石室の時期と分布 早くから朴天秀氏は関行丸古墳や番塚古墳など九州の横穴式石室と朝鮮半島南海岸の全羅南道海南月松里造山古墳などとの関係を論じ、全羅南道栄山江流域の前方後円墳も同様の脈絡で伝わったと考えてきた(朴天秀二〇〇二)。調査例の蓄積、研究の深化によって、九州系横穴式石室は五世紀後半～六世紀前半に存在すること、九州北部から主に導入されるが、朝鮮半島南海岸部で形態の変化を遂げることも明らかになった(金洛中二〇〇八、洪漕植二〇〇九他)。全羅南道咸平馬山里一号墳(東新大学校博物館二〇一五、第七図六)は関行丸古墳や小正西一号墳と酷似し、肥前の石室構築集団が深く関与したと考えられる。上述した肥前からの横穴式石室の拡散の延長線で、朝鮮半島南海岸にも肥前など九州の技術者集団が渡海し、構築にあたったと推測される。

朝鮮半島との双方向の関係 ところで、前方後円墳集成編年七期頃と推測される唐津市仁田埴輪窯跡(美浦編二〇一一)では一部に格子タタキを施す埴輪が存在する。このような格子タタキは栄山江流域の前方後円墳や九州系横穴式石室をもつ古墳などで出土する日本の埴輪の影響を受けた「埴周土器」に特徴的な調整法である。仁田埴輪窯跡の埴輪工人中に、栄山江流域などの「埴周土器」工人が含まれていた可能性が高い。肥前から朝鮮半島南海岸への石室構築技術者の移動とは逆の動きである。

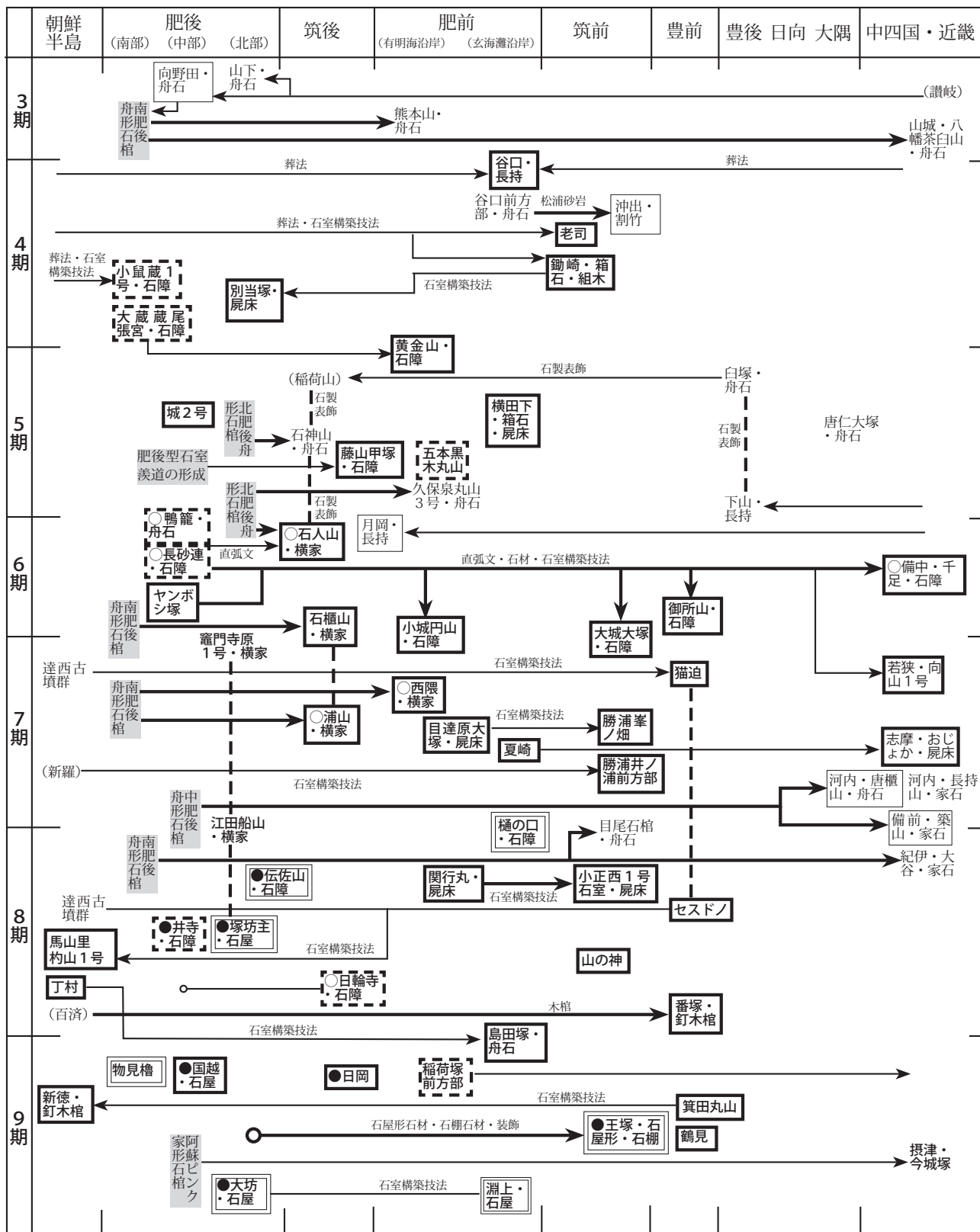
したがって、九州系横穴式石室や前方後円墳、「埴周土器」の問題はこの時期の、対馬海峡を挟んだ九州北部と朝鮮半島南海岸の間の双方向的な首長間交流、さらには古墳建造の共通の基盤の形成を物語るものと思われる。これについては、肥前のみならず九州北部の各地とも関わるので、機会を改めて検討することにした。

## (四) 肥前の初期横穴式石室の拡散と首長、構築技術者

肥前からの横穴式石室の拡散 本稿で取り扱った古墳時代中期の埋葬施設をめぐる系統関係は複雑ではあるが、肥前の首長層が横穴式石室の拡散、定型化において鍵となる活動を重ねた結果と解釈できる(第五・八図)。岡山県千足古墳、三重県おじよか古墳と九州の横穴式石室との関係は早くから指摘されていたが、筑肥型初期横穴式石室を提唱した柳沢氏はそれらが古墳時代中期中頃に集中することに注目し、この時期の活発な地域間関係を想定する(柳沢一九九三)。遠賀川下流の芦屋町大塚古墳や、周防灘に面した荏田町御所山古墳もその延長線にあり、有明海沿岸の首長層との個別の関係を通じて筑肥型石室が採用されたと解釈できる。九州東部への北部九州型初期横穴式石室A類の拡散に際しては、すでに北部九州型初期横穴式石室を定着させていた博多湾以西の地域や、佐賀市関行丸古墳のような佐賀平野の横穴式石室の構築技術を基礎としたものと考えられる(柳沢一九八二、土生田一九八三他)。

このような肥前から他地域への横穴式石室の拡散は、首長間の関係に基づいた横穴式石室の基本構造、構築技術の広がりと考えられる。朝鮮半島南海岸の九州系横穴式石室についても肥前を含む有明海沿岸、博多湾以西の玄界灘沿岸と朝鮮半島南海岸の首長等地域社会の上位の人々の間の地域間関係が背景に想定される。

首長の関与 以上のように肥前からの初期横穴式石室の拡散には、肥前の首長層が深く関与したと考えられる。肥前の首長層は筑後、肥後の首長層との関係のなかで、前方後円墳集成編年五～六期に筑肥型初期横穴式石室を成立させる。有明海沿岸の首長連合のような関係が横穴式石室の展開の背景にあると言える(柳沢一九八七)。ただ、その成立に際しては筑後も含



□ ; 竪穴式石室   □ ; 玄室長方形横穴式石室   □ ; 玄室方形横穴式石室   □ ; 複室横穴式石室

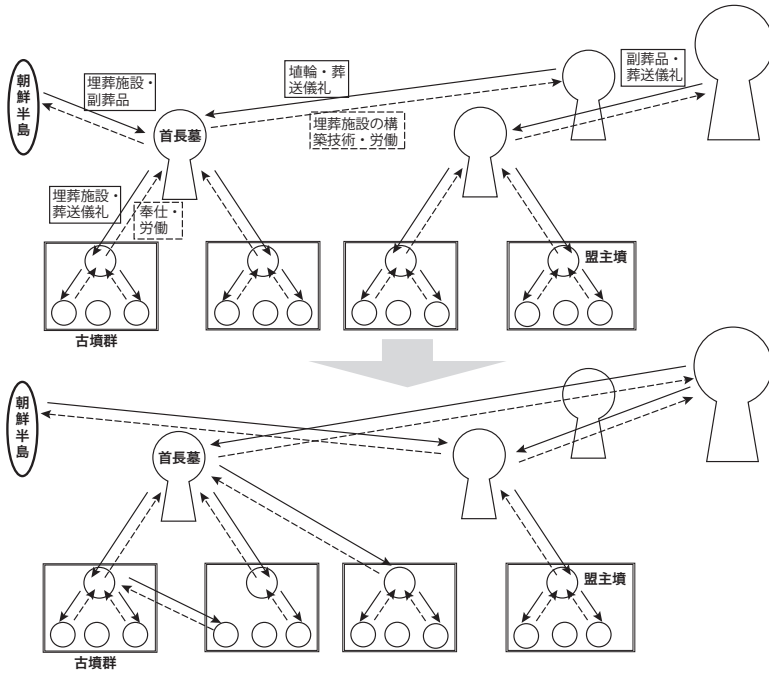
古墳名太字は横穴系埋葬施設、細字は竪穴系埋葬施設   ○ ; 線刻・浮彫裝飾古墳   ● ; 彩色裝飾古墳  
 割竹; 割竹形石棺   箱石; 箱式石棺   組木; 組合式木棺   舟石; 舟形石棺   長持; 長持形石棺  
 横家; 横口式家形石棺   家石; 家形石棺   石屋; 石屋形

第8図 古墳時代中期の九州を中心とした埋葬施設の地域間関係 (重藤2016を改変)

めて多元的な側面が強く、磐井の乱に関して指摘される筑紫君磐井を頂点とする集権的な体制のイメージとは異なる。

このような首長を頂点とする地域社会は、前方後円墳の出現と拡散、埴輪の受容、畿内からの威信財の配布においても指摘される。裏を返せば古墳時代においてはこのような地域首長を軸とした畿内の王権や他地域とのネットワークが重要な意義をもっていたと言える。

**構築技術者の動向** もちろん、首長が自ら横穴式石室を構築するという状況は皆無ではないとしても、稀と思われる。通常は首長の配下であり、農耕・漁撈等に平時には従事する地域の各レベルの集団の成員が石室や墳丘



第9図 古墳時代中期の九州北部における埋葬施設の地域・階層間関係のモデル (重藤2016)

の構築に参加したものと思われる。その際は農耕・漁撈等の生産物の貢納と同様の脈絡で首長層や集団の祖霊に対する奉仕の意味を持っていたものと考えられる (第九図、重藤二〇一六)。

一方、首長墓での築造に参加することで首長の配下の集団成員は横穴式石室に関する情報、技術を獲得することになる。配下の集団の長は中小の円墳などからなる古墳群の被葬者に相当すると推測され、それが中小古墳群に横穴式石室が普及する背景になったと想定される。もちろん、首長層以外での横穴式石室の使用が禁止されず、中小円墳の被葬者層が首長層の埋葬施設を取り入れる意識が存在することが前提条件となる。また、首長層は配下の集団成員を首長連合のような関係にある他地域の首長、上位の首長の葬送儀礼に派遣するようなことも考えられる。他地域に肥前の横穴式室を伝えた技術者はそのような人々に相当すると考えられる。

**地域社会の構成** 以上のように、首長と首長間関係、構築技術者の動向が密接に関連しながら、肥前の初期横穴式石室が各地に広がったと言える。また、初期横穴式石室の拡散、普及は古墳時代の肥前および初期横穴式石室の拡散先の地域社会の構成をも物語るものであろう。

考古学では、社会構成を経済的關係、社会的關係の直接的な観察ではなく、過去の人びとが社会的に残した物質的資料とその動態から考えることが特徴である。本稿で検討した初期横穴式石室の動態は肥前の地域社会、ひいては古墳時代の社会の問題ともつながっている。ただ、このような社会構成の検討は初期横穴式石室などの一種の資料からではなく、性質を異にする複数の資料からの検討を突き合わせる必要がある。本稿で述べたような肥前を軸とした地域間関係、肥前を始めとする古墳時代の地域の社会構成も、別の資料の検討から修正、充実をはかっていきたい。



## おわりに

本稿では肥前の初期横穴式石室の各地への拡散の問題を論じた。横穴式石室の検討では系統、技術的な前後関係、葬法、階層性、技術者の動き、古墳を構築しそこに葬られる首長の意図、地域の社会関係などの様々な側面に迫ることが可能である。本稿の論は仮説の域を出ない部分も多いが、横穴式石室のもつ様々な側面が肥前の初期横穴式石室に典型的に現れていることは、多少は示せたのではないかと思う。

本稿では特に肥前に特有の横穴式石室の地域的類型を設定しなかったが、筑肥型、初期横穴式石室A類、同B類の展開の中で、地域性が形成されてきたといえる。したがって、地域型の形成には地域間の構築技術の交流、その定着という過程をたどったものと考えられる。また、地域型が強調されるのは本稿で取り扱わなかった古墳時代後期、六世紀以降のことであり、機会を改めて検討することにした。

本稿の作成に際して、次の方々に御教示をいただいた。記して感謝いたします。(敬称略、五十音順)

蒲原宏行 甲元眞之 小松譲 辻田淳一郎 土生田純之 三好元樹 柳 沢一男

## 注

(1) 本稿の構想については、二〇一九年七月四日に佐賀大学で開催された「佐賀県の発掘調査成果報告二〇一九」(主催 佐賀県文化課文化財保護室・佐賀大学)で同

題で発表した。

- (2) 横穴式石室の平面規模は都出比呂志氏(都出二〇〇五)の研究を参考にした。  
 (3) 可楽洞五号墳、南井里一一九号墳の規模は報告書を参考にした(鷺室地区遺跡発掘調査団一九七七、朝鮮古蹟研究会編一九三五)。ただ、近年の百濟漢城期の横穴式石室の平面規模等も加えて再度検討する必要も感じている。  
 (4) 小松譲氏は、樋ノ口古墳石障(石材となった砂岩の産地について、これまで考えられてきた内陸部ではなく、唐津市湊の海岸と考えている(小松二〇一七))。

## 引用文献(著者名五十音順)

- 家田淳一編一九九三『切畑遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(一六) 佐賀県文化財調査報告書第一一六集  
 家田淳一・矢野和之・鷺津綾子編一九九一『史跡谷口古墳保存修理事業報告書』浜玉町文化財調査報告書第二集  
 池ノ上宏・吉田東明編二〇一一『津屋崎古墳群』II 福津市文化財調査報告書第四集  
 石山勲編一九七七『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』X 福岡県教育委員会  
 石山勲一九八一『釜塚古墳』前原町文化財調査報告書第四集  
 石山勲・三池賢一九七六『史跡御所山古墳保存管理計画策定報告書』苅田町教育委員会  
 宇野慎敏二〇一三『大村市・黄金山古墳の再検討』『福岡大学考古学論集』二 考古学研究室開設二十五周年記念 福岡大学考古学研究室  
 太田宏明二〇一六『横穴式石室と古墳時代社会―遺構分析の方法と実践』雄山閣  
 小方良臣・舌間悟・古野千枝子編一九八九『下遺跡群』若宮町文化財調査報告書第七集  
 岡村秀典・重藤輝行編一九九三『番塚古墳』苅田町文化財調査報告書第二〇集  
 小倉正五・佐藤良二郎一九八九『葛原古墳再考』『古文化談叢』第二〇集(下)  
 小田富士雄一九七〇『長崎県大村市黄金山古墳調査報告』『九州考古学』第三九・四〇号  
 小田富士雄一九八〇『横穴式石室の導入とその源流』『東アジア世界における日本古史講座四 朝鮮三国と倭国』学生社  
 蒲原宏行一九八三『横穴系横口式石室考』古墳文化研究会編『古墳文化の新視角』雄

## 山閣

蒲原宏行一九九八『織島西分遺跡群』三日月町文化財調査報告書第三集

蒲原宏行・多々良友博・森田孝志・友貞菜穂子・矢野佳代子・堤圭子編一九八四『金立開拓遺跡』佐賀県文化財調査報告書第七七集

唐津湾周辺遺跡調査委員会編一九八二『末盧国』六興出版

木下之治一九六三『佐賀市金立町丸山古墳』『新郷土』昭和三八年四月号

金奎運二〇一八『九州地域横穴式石室の導入過程の検討』『海峽を通じた文化交流』

九州考古学会・嶺南考古学会第一三回合同考古学大会資料集

金武重二〇一三『百済漢城期横穴式石室墳の構造と埋葬方法』『古文化談叢』第六九集(訳・武末純一)

藏富士寛二〇〇九『九州地域の横穴式石室』杉井健編『九州系横穴式石室の伝播と拡散』日本考古学協会二〇〇七年度熊本大会分科会Ⅰ記録集 中国書店

久留米市史編さん委員会編一九九四『久留米市史』第二卷 資料編(考古) 久留米市

## 市

甲元真之二〇一九『羽子板状石室考』『先史学・考古学論究』Ⅶ 龍田考古会

小嶋篤二〇一二『墓域と領域―胸肩君一族の足跡―』『九州歴史資料館研究論集』三

## 七

小林行雄一九六一『古墳時代の研究』青木書店

小林行雄編一九六四『裝飾古墳』平凡社

小松譲一九九九『肥前東部地域の横穴式石室・導入と展開および終末』『九州における横穴式石室の導入と展開』第二回九州前方後円墳研究会資料集

小松譲二〇一七『末盧国と松浦砂岩石室・石棺をたずねて』『考古学ジャーナル』七〇一

## 〇一

近藤義郎編一九九二『前方後円墳集成』九州編 山川出版社

佐賀県一九三〇『佐賀縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』第二輯

重藤輝行一九九二『北部九州の初期横穴式石室にみられる階層性とその背景』『九州考古学』第六七号

重藤輝行二〇一〇『北部九州における古墳時代中期の土器編年』『古文化談叢』第六三集

重藤輝行二〇一一 a 『肥前東部地域における古墳時代前期・中期の埋葬施設』『佐賀

大学地域学歴史文化研究センター紀要』第5号

重藤輝行二〇一一 b 『筑後・肥前の首長墓系譜』『九州における首長墓系譜の再検討』第一三回九州前方後円墳研究会発表資料集

重藤輝行二〇一五『山の神古墳横穴式石室の時期と系譜』『山の神古墳の研究』日本学術振興会科学研究費基盤研究(B) 成果報告書 九州大学人文科学研究院考古学研究室

重藤輝行二〇一六『古墳の埋葬施設の階層性と地域間関係―古墳時代中期の九州北部を例として―』田中良之先生追悼論文編集委員会編『考古学は科学か―田中良之先生追悼論文集』中国書店

重藤輝行二〇一八 a 『おじよか古墳の横穴式石室と九州』『おじよか古墳発掘五〇年記念シンポジウム記録集』おじよか古墳と五世紀の倭』志摩市教育委員会

重藤輝行二〇一八 b 『日本九州地域石室墓の系譜と起源地』『二〇一八百済歴史遺跡国際学術会議 東アジアの古墳文化と百済王陵の位相』予稿集 ソウル特別市・百済学会

七田忠昭一九八三『船石遺跡』上峰村教育委員会

柴元静夫一九七一『夏崎古墳発掘調査概報』『新郷土』第二六六号

島田寅次郎一九二五『上津荒木浦山古墳』『福岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書』

## 第一輯

下田章吾一九九四『ひさご塚古墳』Ⅱ 東彼杵町文化財調査報告書第九集

白石太一郎一九六五『日本における横穴式石室の系譜―横穴式石室の受容に関する一考察―』『先史学研究』第五号

杉山富雄編二〇〇二『鋤崎古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第七三〇集

高橋克壽・永江寿夫二〇一五『若狭向山一号墳』福井県若狭町

朝鮮古蹟研究会編一九三五『楽浪王光墓』古蹟調査報告第二

辻田淳一郎編二〇一五『山の神古墳の研究』日本学術振興会科学研究費基盤研究(B) 成果報告書 九州大学人文科学研究院考古学研究室

都出比呂志二〇〇五『前方後円墳と社会』塙書房

中島直幸編一九八七『双水柴山遺跡』唐津市文化財調査報告書第二〇集

中村幸史郎氏編一九八九『錢亀塚古墳ほか・菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(四)』山鹿市立博物館調査報告書第九集 山鹿市教育委員会

中村弘一九九二『おじよか古墳の検討』関西大学文学部考古学研究室編『紀伊半島の

文化史的研究」考古学編 清文堂

西田和宏編二〇一五『千足古墳』岡山市教育委員会

橋口達也編一九八九『新原・奴山古墳群』津屋崎町文化財調査報告書第六集

土生田純之一九八三『九州の初期横穴式石室』『古文化談叢』第一二集

土生田純之一九九四『畿内型石室の成立と伝播』荒木敏夫編『ヤマト王権と交流の諸相』名著出版

朴天秀二〇〇二『采山江流域における前方後円墳の被葬者の出自とその性格』『考古学研究』第四九卷第二号

東中川忠美編一九八六『久保泉丸山遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(五) 佐賀県文化財調査報告書第八四集

樋口隆康一九五五『九州古墳墓の性格』『史林』第三八卷第三号

古門雅高一九九九『黄金山古墳出土土師器の検討』『西海考古』創刊号

洪濬植二〇〇九『韓半島南部地域の九州系横穴式石室』杉井健編『九州系横穴式石室の伝播と拡散』日本考古学協会二〇〇七年度熊本大会分科会Ⅰ記録集 中国書店

松尾禎作・七田忠志一九四九『大塚古墳』『佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告』第八輯

松尾禎作一九五〇『目達原古墳群調査報告』佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告第九輯

松尾禎作一九五二『横田下古墳』『佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告』第十輯

美浦雄二編二〇一一『仁田古墳群』Ⅱ 佐賀県文化財調査報告書第一八八集

宮原佑治二〇一七『おじょか古墳の横穴式石室の起源に関する一試論』『海の古墳を考える』Ⅵ 学術研究集会「海の古墳を考えるⅥ」実行委員会・海の古墳を考える会

三好元樹二〇一七『おじょか古墳の出土遺物とその評価』『海の古墳を考える』Ⅵ 学術研究集会「海の古墳を考えるⅥ」実行委員会・海の古墳を考える会

武藤直治・鏡山猛一九三七『筑後一條石人山古墳』『福岡縣史蹟名勝天然記念物調査報告書』第一二輯

毛利哲久編二〇〇〇『小正西古墳』穂波町文化財調査報告書第一二集

森下浩行一九八六『日本における横穴式石室の出現とその系譜——畿内型と九州型——』『古代学研究』一一一

森下浩行一九八七『九州型横穴式石室考——畿内型出現前・横穴式石室の様相——』『古代学研究』一一五

森貞次郎一九四九『北九州古墳の編年的考察(予報)』『西日本史学』創刊号

柳沢一男一九七五『北部九州における横穴式石室の展開』福岡考古学研究会編『九州考古学の諸問題』東出版

柳沢一男一九八二『竪穴系横穴式石室再考——初期横穴式石室の系譜——』『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下巻 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会

柳沢一男一九八六『丸隈山古墳』Ⅱ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第一四六集

柳沢一男一九八七『石製表飾考』『岡崎敬先生退官記念論集 東アジアの考古と歴史』下巻 同朋舎

柳沢一男一九九三『横穴式石室の導入と系譜』『季刊考古学』第四五号

山口讓治・吉留秀敏・渡辺芳郎編一九八九『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第二〇九集

山崎信二一九八五『横穴式石室構造の地域別比較研究』一九八四年度文部省科学研究費奨励研究A研究報告

山中英彦編二〇〇五『稲童古墳群』行橋市文化財調査報告書第三二集

横尾義明編一九七七『木塚遺跡』久留米市文化財調査報告書第一四集

渡辺正氣一九五八『佐賀市関行丸古墳』佐賀県文化財調査報告書第七輯

金洛中二〇〇八『采山江流域 初期横穴式石室』登場意味』『湖南考古学』第二九輯

東新大学校博物館二〇一五『咸平馬山里一号墳』

蠶室地区遺跡発掘調査団一九七七『蠶室地区遺跡発掘調査報告』『韓国考古学年報』三